

# 教育 DX ボードメンバー会 第 1 回 開催報告書

テーマ：大学における DX の活用と今後の展望 — Society 5.0 未来社会

## 1. 開催概要

項目	内容
会合名	教育 DX ボードメンバー会 第 1 回
開催日	2026 年 5 月 27 日
テーマ	大学における DX の活用と今後の展望 (Society 5.0 未来社会)
主催	Japan Education Community
参加機関	4 機関 (ジャンル・規模の異なる大学) が参加。内訳は下表のとおり。
運用ルール	チャタムハウスルール (発言者・所属機関を特定できる情報は非掲載)

### 参加機関の構成

種別	規模感
総合大学 (私立)	学生数 約 2 万名規模
医療・生命科学系総合大学 (私立)	学生数 約 8 千名規模
女子大学 (私立・人文社会系)	学生数 約 1 千名規模
女子大学 (私立・体育系)	学生数 約 3 千 5 百名規模

本報告書は、Japan Education Community が開催した教育 DX ボードメンバー会 第 1 回の議論内容を外部公開用にまとめたものです。話題提供として、参加大学における DX 実装事例 (施設・PC 利用状況のリアルタイム可視化、CX ツール連携、AI によるデータクレンジング、図書館 DX 等) が共有され、これを起点に「DX の本質とは何か」をめぐる本音の議論が行われました。

## 2. 話題提供の要旨

話題提供では、大学 DX を「データを収集・統合・分析・可視化・活用する一連のプロセス」と定義したうえで、以下の実装が紹介されました。

- 教室・施設の混雑状況、自習用 PC の空き状況、学生の在館状況などを API 連携によりリアルタイムに可視化
- マルチチャネル (Web/LINE/SMS/SNS) と AI チャットボットを組み合わせた学生サポート
- 問い合わせ・検索・利用履歴を CRM へ蓄積し、AI でデータクレンジングのうえダイレクトマーケティングへ活用
- 図書館 DX (OPAC・電子ジャーナル・アクティブラーニングスペース等)

話題提供を貫く中心命題は「システム導入 ≠ DX」「DXの本質はエンゲージメントである」という点であった。学生はCX（Customer Experience）、教職員はEX（Employee Experience）として捉え、関係性の向上こそをゴールに置く設計思想が示された。

### 3. 議論で得られた主要な論点

話題提供を受け、ボードメンバー間で活発な議論が行われました。とりわけ、実装事例の「成功面」よりも、現場が直面する本質的な難しさに議論が集中したことが今回の特徴です。主要な論点を以下に整理します。

#### 3.1 学生のエンゲージメントをめぐる逆説

- 今の学生は「つながり」を求めている。一方で、対面でのつながりは「面倒」と感じる傾向が強い。
- この逆説に向き合うには、日常に潜む「小さなストレス」を見つけ出すことが重要である。
- 体感・体験を、学生が意識せずとも辿る「導線」のなかに自然に組み込んでいく必要がある。

つながりを求めながら対面を避ける学生像に対し、「場を用意して呼びかける」従来型のアプローチは機能しにくい。負担感のない接点をいかに動線へ埋め込むかが、CX設計の核心であるとの認識が共有された。

#### 3.2 インサイトはアンケートでは取れない

- アンケートを取っても、出てくるのは表面的な回答にとどまる。
- 学生の本質的なインサイト（深層の課題・本音）は、アンケートという手法では取得できない。
- そのため、行動データや体験の観察を通じて、間接的にインサイトへ迫る設計が求められる。

#### 3.3 「システムを入れること」とDXの混同

- システムを導入しても、それだけではDXにはならない。
- むしろ運用次第では、現場の手間がかえって増える場合すらある。
- DXの出発点は、システムではなく業務そのものの見直しにある、という認識が改めて確認された。

#### 3.4 業務の棚卸しという「アンタッチャブル」

- DXの前提となる業務の棚卸しには、手をつけにくい「アンタッチャブル」な領域が数多く存在する。
- 既存の業務フローや慣行に踏み込むことへの心理的・組織的な抵抗が大きい。

#### 3.5 職員のITリテラシーという現実

- 大学職員のITリテラシーは、一般に想像されるほど高くはないのが実態である。
- いまだに一太郎やExcelで文書を作成するといった運用が現に残っている。
- 先進的なツールを前提とした施策が、現場の実態と乖離するリスクがある。

#### 3.6 書式変更を「誰がやるのか」問題

- 業務の棚卸しには、既存書式の変更が不可欠である。

- しかし、その変更を「誰が担うのか」という点で、部門間の押し付け合いが生じやすい。
- 作業負荷の所在と責任の所在が定まらず、棚卸しそのものが停滞する構造的な要因となっている。

## 4. 論点の構造的整理

今回挙げた論点は、大きく「学生側（CX）の難しさ」と「組織側（EX・運用）の難しさ」に分けて捉えることができます。

領域	本質的な難しさ	示唆される方向性
学生 CX	つながりは求めるが対面は面倒。本音はアンケートに表れない。	体感・体験を動線へ自然に組み込み、行動データからインサイトを読み解く。
教職員 EX	IT リテラシーの実態、旧来の文書運用が根強く残る。	現場の実態を前提とした、負担を増やさない設計と段階的な底上げ。
業務・運用	棚卸しはアンタッチャブル。書式変更の担い手が決まらない。	棚卸しと書式変更の責任主体・推進体制を先に定義する。

システム（手段）の議論に先んじて、業務の棚卸しと推進体制（誰が担うか）を定義しなければ、DX はむしろ現場の負担を増やす。今回の議論は、第0回資料が掲げた「システム導入 ≠ DX」という命題を、現場の実感から裏づけるものとなった。

## 5. 総括

本会合を通じて、大学 DX の本質的な課題は技術の有無ではなく、「学生・教職員のエンゲージメントをどう設計するか」「業務の棚卸しと書式変更を誰がどう担うか」という、組織と人に根ざした問いにあることが明らかとなりました。

学生は『つながりを求めつつ対面を避ける』という逆説を抱え、その本音はアンケートでは捉えきれません。一方で組織側には、IT リテラシーの実態や旧来の文書運用、棚卸しの担い手不在といった、手をつけにくい現実が横たわっています。

『システムを入れること』を DX と混同せず、体感・体験を動線へ織り込む CX 設計と、推進体制を明確にした業務の棚卸しを両輪として進めることが、次の段階に向けた共通認識として確認されました。

### 本報告書について

本報告書は Japan Education Community が主催した教育 DX ボードメンバー会 第1回の議論内容を外部公開用にまとめたものです。チャタムハウスの適用により、個別の発言者・所属機関を特定できる情報は掲載していません。参加機関および話題提供事例についても、種別と学生規模の表記に置き換えています。

お問い合わせ：[contact@japan-education-community.org](mailto:contact@japan-education-community.org)